自尊感情・対人信頼感・文化的自己観に関する日本とスウェーデンの比較調査研究

── 大学生・教員・福祉職員への聞き取り調査報告 ──

A Comparative study of Self-esteem, interpersonal reliance, and cultural view of self between Japan and Sweden

── Focusing on group interviews including university students, teachers, and welfare personnel ──

大塚　明子*・森　　恭子**・秋山美栄子***・星野　晴彦****
Meiko OTSUKA, Kyoko MORI, Mieko AKIYAMA, Haruhiko HOSHINO

要旨：本稿では「価値観・労働観・ライフスタイル等に関する日本と北欧の比較調査研究」の第一次量的調査で取り上げた設問のうち、自尊感情・対人信頼感・文化的自己観の３つの心理尺度に焦点を当て、第二次質的調査のインタビューによってその解釈を深めることを試みた。共通して伺えたのは、スウェーデン人が自己及び周囲との相互作用というミクロな焦点化をおこなうのに対し、日本人は一般的な社会というマクロな視点から俯瞰する、という傾向であった。第一次量的調査ではスウェーデン人の相互独立性と評価懸念の両立という、文化的自己観に関する先行研究と異なる結果が得られたが、それを整合的に解釈することができたのが最大の成果の１つと考える。なぜ社会人と比べて大学生のほうがより「日本人らしさ」、つまり低い自尊感情・対人信頼感・相互独立性＋高い相互協調性を示すのかについても、社会的に不利な立場が大きな要因であることが示唆された。

キーワード：文化的自己観、自尊感情、対人信頼感、スウェーデン、質的調査

１．本研究の経緯とテーマ

筆者らは2010年度から共同で「価値観・労働観・ライフスタイル等に関する日本と北欧の比

* おおつか めいこ　文教大学人間科学部
** もり きょうこ　文教大学人間科学部
*** あきやま みえこ　文教大学人間科学部
**** ほしの はるひこ　文教大学人間科学部

較調査研究」を行っている（大塚ら［2011］）。この比較研究の核は、日本とスウェーデンで実施した共通の質問紙による量的調査で、大学生・教員・福祉職員の３グループを対象とした（以下、本稿では第１次量的調査と呼ぶ）。さらに両国でそれぞれ同じカテゴリの３グループ[i]へのインタビュー調査を追加し（以下、本稿では第２次質的調査と呼ぶ）、解釈と分析をより深めることを試みた。我々の共同研究のうち、外国人に対する意識及び多文化主義への考えに関しては既に考察を発表しているので（森ら［2013］）、第１次・第２次調査の詳細に関してはこちらを参照されたい。

本稿は、第１次量的調査で使用した心理尺度のうち、自尊感情（Rosenberg［1965］）[ii]・対人信頼感（堀井・槌谷［1995］）・相互独立的／相互協調的自己観尺度（高田［2000］）の３つを取り上げる。これらの統計的な分析は既にいくつかの論文で発表したが（大塚ら［2011a・2011b・2012］）、さらに第２次質的調査の中で該当する部分のインタビューを検討し、解釈を深めることが目的である。

上記の３尺度については、その相互関連を示唆する先行研究がある。例えば大規模な国際比較調査「職業とパーソナリティ研究」では、「セルフディレクション（self-direction）」と「同調性（conformity）」の２つを設定している。前者は高い「自尊感情」や「自己効力感」を中核にもち、同時に「オープン・マインドをもって他者を信用」する。このため独自の「内的な基準」を遵守しつつ、現実に「柔軟」に対応することができる。これに対し、後者は「独自行動に踏み出すことにはリスクがあると考え」「外的な権威へのかたくなな準拠」に向かう（吉川編［2007：21-28，67］）。

我々の第１次量的調査でも、両国とも自尊感情と対人信頼感の間に中程度の正の相関がみられた（日本．39、スウェーデン．36、いずれも $p<.01$）。
相互独立的／相互協調的自己観尺度について、我々の第１次量的調査では先行研究と異質な結果がえられた。確かに前者はスウェーデン人のほうがかなり高かったが、後者は有意差がなかったのである。これは意外な結果で、第２次質的調査ではその解釈を重点的に訊ねた。

もう１つの重点項目がグループ間の差である。スウェーデンではグループ間の違いが相対的に小さいのに対し、日本では多くの点で顕著であった。日本人のインタビューでは、この点の解釈にも重点をおくこととした。

紙面の制限上、以下のインタビューの引用では省略語を使用し（ス：スウェーデン／日：日本／学：大学生／福：福祉職員／教：中高教師／大教：大学教員／イ：インタビューア／Ｇ：グループ）、個人の識別は通し番号（ス１～18・日19～30）で付加する。

２．自尊感情について

⑴　非自己主張的な２文化

日本人の自尊感情が低いという結果については、「本音」と「建前」を使い分ける「謙遜の文化」から、本心と違う可能性もあるという指摘があった。興味深いのは、スウェーデン人からも多少類似する発言が出たことである。教員Ｇの１人が「スウェーデン人は自分を高く評価しない」と言ったのに対し、もう１人が「スウェーデン人は言わないだけで、内的な自己評価は高いだろうと思う。アメリカ人は内心自信がなくても、外にはあるように振る舞う」（ス・教６）と反論。最終的には全員が「スウェーデン人は自尊感情が高いと思うが、それを口にはしない」とい

う意見に同意した。

アメリカ人のように外的な強い自己主張を是としないことが、もし他者との軋轢を避けるためであれば、こうしたスウェーデン人のやり方でも十分に達成されるはずである。しかし、日本の場合、匿名の調査票にも「本心」を書くことが憚られるとすれば、それはなぜだろうか。

１つの解釈として、内的な自己評価の高さを、何らかの形で他者に感じ取られてしまうことを警戒する、という可能性が考えられる。日本人の自尊感情尺度による測定値の低さについて、かつてゼミで学生の意見を聞いたところ、「日本人はマイナスチェックが激しい、例えば皆でファッション雑誌を見ていて、掲載されている素人であまりかわいくないと思う子に対し、『これに応募したということは、この子は自分をかわいいと思っているんだよね』といった悪口をよく言い合ったりする」という発言があった。つまり日本文化では、他者による一般的評価と自己評価の不一致に対し、強いサンクションが課せられる。それを回避する安全策として、自分が自分自身に認める自己評価も低い水準に抑えるよう、心理的な抑制が働くのではないだろうか。

⑵　職業に対するミクロ／マクロな視点

日本人の自尊感情のグループごとの平均値は、教員 33.3 ＞福祉職員 28.8 ＞学生 24.9 で、どの 2 グループ間にも有意差がある（p<.001）。まず教員と福祉職員の差に関して。

「教員というのは、日本ではすごい社会的な地位がある仕事だからですよね。」「日本で福祉の仕事って、すごい重要な仕事だと言われている割に全然社会的な保障がないですし、たぶん賃金も安いと思うので、・・。」（日・教 23）

「福祉の仕事というのが、日本の中だとイメージがなんか悪いみたいな印象を受けて、どちらかというと教員とか公務員というのは、しっかりとした仕事というイメージが付いているから、・・。」（日・学 30）

教員は「社会的」、学生は「イメージ」を鍵的な語として使っている（福祉職員 G では他の質問に重点をおいたため聞けなかった）。だが、どちらも一般的な社会的位置づけによって自尊感情が左右されるのではないか、という趣旨であろう。

これに対し、スウェーデンのグループごとの平均値は福祉職員 39.2 ＞教員 37.4 ＞学生 36.6 の順で、福祉と学生の間にしか有意差がなかった（p<.05）。社会人 G は数値的に福祉職のほうが高く、教員と学生より差が大きい。日本と比べて福祉職の相対的な自尊感情の高さが際立つ。これはどうしてだと思うか訊ねた。

「社会的に感謝される仕事なので、自己評価が上がるのではないか。」（ス・学 3）

「福祉職は感謝されるし、仕事に意義を感じるから、・・。」（ス・学 4）

「高齢者の介護を自分のもっているもの全てを打ち出さねばならず、自分を知ることにつながる。また自分が満足できる仕事をしていれば、自尊感情が高まるのではないか。」（ス・福 11［所長］）

「似た意見だ。我々は人間と仕事をしている。自分を道具として仕事しているので、自尊感情がだんだん高まると思う。」（ス・福 14）

「私たちは家族の一員のように介護しており、精神的・肉体的に近い。いい仕事をすれば、

自分の成長にもつながる。」(ス・福 13)
「自分にとっては、家族や仲間や入居者など、周りの人にやさしくすることが自尊心を高めている。」(ス・福 12)

キーワードと思われる単語を抽出しつなげてみると、「人間」相手の仕事で「感謝」されることが多く、このため「意義」や「満足」を感じ「成長」もできるから、とまとめられよう。前述した日本の教員や学生と比べると、視点がミクロという印象を受ける。日本人が職業を社会的な位置づけというマクロな視点から俯瞰するのに対し、実際に働く現場の相互作用と主観に焦点を当てているのだ。

同じ傾向は、教員の自尊感情の日本と比べた相対的な低さに関する解釈でもみられた。

「教育費の節約で、先生の役割が問い直された。先生は社会的ストレスやプレッシャーが高いから、自尊感情が低くなるのかもしれない。」(ス・福 11［所長］)
「教師は高い教育を受けているから、自分を低評価しがちなのではないか。」(ス・学 3)
「アカデミックな教育を受けた人は、それなりの職業に就くから、社会からの要求が高くなる。」(ス・大教 1)
「(イ) 日本人には新鮮な考え方だ。大学教育を受けると、自分に対するアスピレーションが上がるということか。」
「そうだと思う。自分に対する要求を満たせる人は自尊感情が上がるが、満たせない人は下るということ。」(ス・大教 1)

ここでは日本と同様「社会」がキーワードの１つとして登場し、教員の社会的地位の高さが認められている。だが、日本と違い、それが自尊感情の高さに直結するとは考えられていない。「高い教育→高い社会的地位→社会的なプレッシャー＋自己に対する要求水準の上昇→仕事がうまくいかなかった場合は自尊感情の低下」という因果系列が想定される。社会的な地位やプレッシャーというマクロな外的要因は、自己に対する要求水準を自分の実際の仕事がクリアしているか否かというミクロな内的要因を媒介として、あくまで間接的に影響力を及ぼしている、という解釈であろう。福祉の場合と同様、やはり焦点は現場の相互作用と主観にある。

職業について、社会的な位置というマクロな視点から俯瞰する日本人と、働く当人のミクロな主観に焦点を当てるスウェーデン人。これは両国のより広い文化的背景、例えば集団主義と個人主義といった違いに起因する可能性もある。他方で、日本では教員と福祉職の社会経済的な地位の格差が、現場や個人への注目をかき消すほどに大きいということかもしれない。

(3) なぜ学生の自尊感情は低いのか

自尊感情は両国ともに 50 代まで年齢とともに上昇する傾向があり、学生 G で低い。この点について質問したところ、次のような答えがあった。

「若い時に自尊心が低いのは当然だろう。発展していないから。」(ス・大教 15)
「学生はまだ道が決まっていないからだろう。」(ス・学 16)
「学生はお金もキャリアもないから。」(ス・学 17)

「社会の中で自分は何か。役目があるわけではまだないから、そういう不安とかもあるのかなと思いました」(日・教 24)
「就職して社会に出ると、やっぱりいろいろ学ぶことがあるじゃないですか。・・だんだんと仕事をこなしていくことによって、やっぱり自信がついてきて、それが蓄積していって自信につながっていくのかなという。学校ですと、やっぱりそういった環境じゃないんですよね、逆に勉強の場であって。」(日・学 27)

精神的に未熟であること、社会の中で明確な位置と役割を得ていないこと、これらは確かに自己に関する不確定感を喚起し、自尊感情を下げる普遍的な要因といえよう。スウェーデンではグループ間の差が小さいが、大学生 G の 1 つが福祉系の学部で、おそらく一度就職した後に大学に戻った学生が多いことがその一因だと思われる。

日本は 20 代初めの若い学生ばかりであることが自尊感情を下げる大きな要因であろうが、10 代のスウェーデン人と比べても著しく低く、また日本人の 30 代以降との差も大きいのはなぜか。日本の教員の 1 人は、学業やスポーツの成績・異性からの人気といった、ヒエラルキー的な価値基準に縛られるからではないか、という解釈を述べた。

「ヒエラルキー的に上みたいな、・・。そういう価値基準を回りからも、先生からも植え付けられた人が多いから、そうじゃない自分を見ると基準が低くなるんですかね。」(日・教 23)

学生が教師や周囲からヒエラルキー的な価値基準を受け付けられるという指摘は、教育の問題に関連する。スウェーデンでは教員 G に「スウェーデンでは自尊感情を高めるよう教育しているのか ?」と訊ねたところ、全員が肯定した。そこで日本人教員 23 さんの前記発言を受け、近年の教育の動向について聞いてみた。

「(イ) 文科省が言っていることでは、個性教育であるとか、自分の価値を上げる教育・・、・・。現場の先生の感覚としていかがなんでしょうか。自尊感情上げるような教育になってきているとお考えですか。」
「思わないですね。」(日・教 24)
「全然思わないですよね。」(日・教 23)
「(イ) よく自分らしさとか、そういうことがいろいろ言われているわけですけども、あんまりそういうことを上げる教育には全体的になっていないということなんですね。」
「全く、と思いますけど。」(日・教 23)
「なんでも個性教育といって認めていくと、何がいいか、全ていいみたいになってしまうのもあるし、わがままも言いたい放題になるというか、・・。」(日・教 24)

日本人教員 G には多文化教育についても質問したが、「全体的なまとまり」の障害になるから、教師は内心それを望んでいないという答えだった (森ら [2013b])。ここでも似た理由で「個性教育」が否定的にみられている。他方で、80 年代以降、社会的な批判の的になってきた「偏差値教育」のほうは、現在も少なからず残っているという。

「偏差値で輪切りされると、偏差値でまず自尊心傷つけられているわけじゃないですか。」(日・教 23)
「(イ) そこらへん全然変わっていないと思います?」
「全然変わっていないというのは、たぶんないと思いますけども、少なからずそういう意識はあると思うんですね。・・」(日・教 23)・・
「(イ) 結局、日本人の自尊感情は社会の中の自分の位置で決まるということですか。」
「[それは] 多分にあるというか、すごい大きな要素の一つだと思いますよ。」(日・教 23)

学生なら偏差値、社会人なら自分の職業の社会的地位が、日本人の自尊感情の大きな規定要因になっているという意見である。

これに対して日本人の大学生は、自分たちの自尊感情の低さに関し、教員とはまた別の面から教育の問題に言及した。

「日本だと、やっぱり大学生までは全部親に出してもらうという子も中にはいるし、・・。・・就職してから奨学金返したりとか、給料初めてもらったりとか、そういうので独立、自分で生きていけるんだなという意識が芽生えていくのかなとは思います。」(日・学 29)
「私も 28 さんと結構同じで、やっぱり大学って、100 万とか毎年かかっちゃって、・・家庭で大変なんだろうなと思ったりとか、・・。」「自分が生み出すことはなくて、いつもお金を出してもらってばっかりいるので。」(日・学 28)

我々も私大の教員として、少なからぬ学生が、保護者に学費の負担をかけていることに対し、心理的な負い目を感じていることに気づく経験がある。スウェーデンでは教育が原則無料のため、こうした感覚はもたずにすむ。

教育の中で依然としてヒエラルキー的な評価基準が大きいことと、多大な教育費。我々が対象とした日本の大学生 G の著しい自尊感情の低さには、この 2 つの要因が大きく関係しているのではないかと思われる。

3. 対人信頼感について

対人信頼感の大きな傾向として、20 代を底として年代が上がるとともに上昇し、引退後の 60 代に低下する。ただスウェーデン人の対人信頼感は全般的に日本人より高く、グループ間の有意差もない。この結果をスウェーデン人にグラフを見せながら説明し、感想を訊ねた。

*「自分は、反対の兆候 [嘘・裏切りなど] が出るまでは、人を信じる。私は人を信じたいというのが基本。」(ス・学 16) * [ ] 内は後に具体的内容を訊ねて補足*
「疑うべきことがなければ信じていいと思う。」(ス・学 17)
「自分もそう思う。人を信じたいでしょ?」(ス・学 18)
「2 ～ 3 回騙されるまでは、ともかく信じる。それは多分、文化性によるだろう。スウェーデン人は伝統的に人を信じたいという気持が強い。」(ス・大教 1)

「最初は信じる→後に妥当な根拠が見つかれば不信に転換する」という戦略である。この対人信頼感の高さの背景について意見を聞いた。

「（イ）『人は清い生活を送っている』等は、自分に危害を与えないことより踏み込んだ、性善説的な信頼だと思うが、どうして高いのだろう？　学校教育だろうか？」
「家庭教育だと思う。『自分がしてもらいたいように人にせよ』と教わった。」（ス・学 16）
「学校でも習っているだろ。」（ス・学 17）
「（イ）『自分がしてもらいたいように人にせよ』というのはキリスト教の影響もあるだろうか？」
「そうだろう。」（ス・学全員）
「キリスト教は昔のことなので、因果関係が切れていることもある。」（ス・学 16）

スウェーデンは様々な国際調査で一貫して低い宗教性を示す国の１つで、我々の第１次量的調査の宗教に関する設問でも日本人と有意差がなかった（大塚ら［2011a］）。従って、上記の発言にみられるキリスト教の影響は、直接的に教会を通じてというのではなく、文化に浸透しているということだろう。

それでは日本はどうか。こちらは学生が顕著に低いのが特徴である。教員・福祉職の社会人２グループだけを抜き出して比べると、スウェーデン 55.4 ＞ 53.2 日本で有意差はあるが（$p<.05$）、差は小さい。

調査結果を示して解釈を聞いたところ、自尊感情の箇所でも登場した「本音」と「建前」の使い分けに関連する意見が出された。

「日本人というのは基本的にシャイな人が多くて、本音と建前というのもありますけれども、胸襟を開いて、どんな人でもコミュニケーションを取っていけるというのが、ちょっと苦手なような気がするので・・。・・」（日・教 23）
「日本人は、お世辞とか言うじゃないですか。・・友だち同士でも、最初あんなに仲よくしゃべったのに、裏では悪口言われていたとか、・・優しい嘘をよくつくというか、そういうことが当たり前にやっているから、だんだん重なっていって、信頼とかにかかわってきているのかなという。」（日・学 28）
「（イ）あまり思っていることを言っていないというふうに、みんな思っていると。・・スウェーデンの学生さんに聞いたら、信用できないということがはっきりするまでは人を信じる、それが普通だみたいなことを言っていたんですよね。」
「知らない人とは、取りあえず壁を作ってから、徐々に慣れていくみたいな感じで、もういいかなというときに、自分の内面をどれだけさらけ出せるかというので、用心深く。いきなり自分のことを全部出していくと、相手が引いちゃうというのは感じますね。」（日・学 30）

上記の意見を総合すると、「本音と建前を使い分ける→お互いオープンなコミュニケーションができない→相手に対する信頼感が上がらない→本音と建前を・・」というループがある、ということになろうか。ただ、これが日本の全般的な文化だとすれば、なぜ学生と社会人で対人信頼感に顕著な差があるのかの説明にはならない。

なぜ社会人になると対人信頼感が上がるかについて解釈を聞いたところ、チームワークの経験が鍵ではないかという意見が出された。

「やっぱ言ったら、相手もわかってくれてっていう部分で、じゃあ信頼してくれてるんだなっていうところも出てきたので。・・社会人になって、経験で信頼感が上がってきたのかなとは、自分で思いますけれど。」(日・福 21)
「やっぱり社会に出ることによって、チームワークっていうか、生産ですね。集団で生産していくなかに、連帯感とか生まれることによって、高くなってくるとは思うんですよ。」(日・福 19)

社会に出てチームワークの経験を重ねることで、ようやく対人信頼感が上昇する──。この意見は様々に考えさせる。日本の学校教育の特質は、まさに班やクラブや各種行事といった集団活動の重視にあるはずだ。それらは生徒に外的な同調を教え込んではいるが、コミュニケーションやチームワークを通して内面的な他者への信頼を培うような効果はもっていない、ということだろうか？

学校に関連して、大学生からは、いじめ対策の不十分さが社会に対する不安を呼んでいる、という意見も述べられた。

「自分たちが対人信頼感が低いというのは、やっぱり社会に対して不安とかもあるんじゃないのかなあなんて思うんですけど」(日・学 27)
「(イ) 社会は温かいところではないというふうに、みんな思っちゃっていると。」
「はい。・・テレビとかですごい報道されていて、そういうイメージが自分の心の中についてくるというか・・。」(日・学 27)
「学生の立場が弱いというか、・・トラブルとかに巻き込まれたときに、自分一人の力じゃ対応できないから、そういうのに遭わないように、まず人を信用しないとか。」(日・学 30)
「守ってくれる人がいないというのもあるのかなと思います。親に話しして、親が介入してくる可能性もあると思うんですけど、やっぱりなかなか介入できない場合もありますし、・・。」(日・学 27)
「いじめに対しての大人の介入というのは、日本だと受け身な感じがして、・・。・・大人に守られていないというふうには感じちゃう。」(日・学 30)

学校を含めた社会は、若者を守ってくれる温かい場所ではない──多くの大学生がこうした否定的なイメージを抱くのも、確かに無理からぬことだと考える。いじめ対策だけでなく、就職につまずけば「ニート」とバッシングされ、正社員になってもブラック企業は怖い、といった負の情報がマスコミには溢れている。日本人の大学生の対人信頼感の低さは、自尊感情の低さに加えて、社会に対して抱いている不安感も主因の１つではないだろうか。

４. 文化的自己観について

最後に文化的自己観について、ここまで取り上げた自尊感情や対人信頼感についても考慮に入

れながら考察したい。

既に触れた通り、この尺度を構成する2つの下位尺度のうち、相互独立性の平均値はス4.88＞日3.96でスウェーデン人のほうがかなり高く（p<.001）、欧米の人々は個人主義的という先行研究を追認する結果となった。これに対し、アジア的とされてきた相互強調性は、ス4.59≒日4.68で有意差がなく、同程度に高かったのである。また国別に因子分析を行っても、同一の因子構造がえられなかった（大塚ら 2011b）。そこで第2次質的調査では、設問ごとに結果を示して意見を聞くこととした。

⑴ スウェーデン人における相互独立性と相互強調性の両立

相互独立性4問・相互強調性6問からなり、後者はさらに「評価懸念」2問と「他者への親和・順応」4問に分かれるとされる。この「他者への親和・順応」のうち、「［10］相手やその場の状況によって、自分の態度や行動を変えることがある」など3問は先行研究の想定通り日本人のほうが高かったが、「［5］自分がどう感じるかは、自分が一緒にいる人や、自分のいる状況によって決まる」はスウェーデン人のほうが高かった（［ ］内の数字は調査票の番号、以下同じ）。

そこで「5と10は［『他者への親和・順応』という］似た設問と作成者は想定していたが、どう思うか」と問いかけた。

「私は同じと思わない。最初の質問［5］は内面的な感情で、皆のムードを受けてしまう。例えば職場の雰囲気が暗いと、自分も暗くなる。後者［10］は態度 Attitude。」（ス・学3）
「私も、最初の設問［5］は気持ち feeling で、後者［10］は行動だと解釈する。」（ス・大教1）
「最初［5］は内面の感情 feeling だが、後者［10］は態度 Attitude や行動や意見だから、違う。」（ス・教皆）
「前の質問［5］は感情、後［10］は行動と理解する。」（ス・福11［所長］）
「前者［5］は感情、後者［10］は行動や態度 Attitude だから、全然違う。」（ス・大教15）
「（イ）→皆もそうか？」
「はい。」（ス・学皆）

皆が一様に、内的な感情（feeling）と外的な態度（attitude）・意見・行動を峻別していることが分かる。後者の「［3］相手は自分のことをどう評価しているかと、他人の視線が気になる」はス5.05＞日4.65でスウェーデンのほうが高く（p<.001）、「［1］人が自分をどう思っているかを気にする」は両国とも4.8前後で有意差がなかった。また「独断性」の2問、「［4］自分の周りの人が異なった考えを持っていても、自分の信じるところを守り通す」と「［2］自分でいいと思うのならば、他の人が自分の考えを何と思おうと気にしない」はどちらも日本人より顕著に高い。

最初の大学（福祉系）で、この「独断性」と「評価懸念」の両立について解釈を訊ねたところ、「自分の意見をきちんと言うためには、人の意見を聞かなければならない。人の評価を気にすることと矛盾しない」（ス・学2）という答えだった。もう1つの大学生G（経営系）や教員も全く同じである。

「人の評価を気にしても、自分の意見を変えることにはつながらない。」（ス・学17）
「スウェーデンでは小さい時から、自分の意見もはっきり言うが、人の意見も聞くように教

わる。それで矛盾ということはないのでは？」（ス・学皆）
「（イ）日本なら、人の評価を気にするからこそ、人に合わせてしまう。」
「スウェーデンでは人に気に入られるために自分の意見を変えたりすると、人に嫌われる。」（ス・学17）
「（イ）内心では人の評価を気にするが、それと外に一貫した態度を示すことは全く別の問題ということか？」→「そうだ。」（ス・教皆）

スウェーデン文化は、一貫した固有の態度を示す個人を高く評価し、そのためにこそ他者の視線や評価への内的な敏感さが必要となる、ということだろう。

このスウェーデン人の「評価懸念」の高さは、3.で述べた対人信頼感の高さとも結びつくのではないかと思われる。社会心理学者の山岸敏男によれば、囚人のジレンマ実験において、被験者の一般的信頼の高さと相手の行動予測の的中度が高い相関をもつ。つまり、高信頼者は「単なる『お人好し』どころか・・シビアな観察者」であり、「他人が本当は信頼できるのかどうかに対してセンシティブで・・柔軟性を持っている」のだ（山岸［2008：150-54］）。

これに対して日本人は低信頼・非協力の傾向が強く、「アメリカ人よりも個人主義的」だという（i13d.：93）。この結果は、日本人が実験の相手を「ソト」の人と認知しているからと解釈すると分かりやすい。我々の第一次量的調査の援助規範尺度（箱井・高木［1987］）の分析からも、スウェーデン人は多少の痛みをともなっても不特定多数を援助するが、日本人は直接的な関わりのある「ウチ」の人に対して恩を返す、という知見がえられた（星野ら［2012a・2012b］）。

⑵ 「日本文化論」の持続性

最後に日本について、まず年代やグループ間で有意差がなく、日本人の全体的な特徴といえる設問は、問6「自分の所属集団の仲間と意見が対立することを避ける」と問8「人と意見が対立したとき、相手の意見を受け入れることが多い」の2つであった。国×年代の二元配置分散分析の詳細については大塚ら（2012）に譲り、結論だけ述べると、前者は全く有意差がないが、後者は日本が顕著に高い。スウェーデン人は、可能な限り仲間との同調を志向するが、どうしても回避できず対立が露呈してしまったら、その後は一転して自らの意見を堅持するということだろう。

これに対して日本人は、いったん対立が顕在化した後も、自分の意見を調整して周囲と一致させようとする。この結果について意見を聞いたところ、教員の多くは他の箇所でも登場した「本音」と「建前」や「和」という、高度成長期以来の「日本文化論」で常に指摘されてきたキーワードを用いて解釈を述べた。

「自分の思っていることと、自分の行っている行動が食い違っていたとしても、別にそれはそれで仕方ないし、当たり前のことだと思っているんじゃないですかね。」（日・教23）
「日本の場合は・・本音と建前で動いている部分があるので、もちろん意見が違ったりすることはあるんですけど、それを表だって表面に出して、それによって対人関係が壊れたりとか、和が乱れたりということをやはり嫌う民族なので、・・」（日・教25）

スウェーデン人は一貫した固有の態度を示す個人を、日本人は「本音」を主張せずその場の「和」に同調する個人を、それぞれ高く評価するということだろう。

次に相互協調性の下位尺度「評価懸念」について、やはり詳細な分析については大塚ら（2012）に譲るが、他者の視線や評価に対する青年期の敏感さは、スウェーデン人でも加齢とともに低下する傾向が伺える。だが、日本の特質はその度合がより顕著なことで、社会人は若者に比べて急速に鈍感になっていく。日本で年代による有意差があるのが、問1「人が自分をどう思っているかを気にする」・問3「相手は自分のことをどう評価しているかと、他人の視線が気になる」・問10「相手やその場の状況によって、自分の態度や行動を変えることがある」の3問である。この点について解釈を訊ねたところ、やはり「日本文化論」でお馴染みの「年功序列」というキーワードが使われた。

「年功序列の文化ってスウェーデンはあるんですか。」（日・学30）
「（イ）ない。」
「ないですよね。たぶん、大人になっていくにつれて、周囲がどう思っているかを気にしなくなるのは、50代、60代になると、見られる側じゃなくて、回りを見る側だと思う。」「評価する側で、自分のことは二の次か、もしくは自分が間違っていないと思っているか、どっちか。」（日・学30）
「日本の社会が、いまだに年功序列だからじゃないですかね。」「年が上がれば自分がどう思われているかなんていうのは気にせずに行動できるようになるんじゃないですか。年を取ることイコール偉いこととなっていく。」（日・教23）

日本社会は依然として「年功序列」、すなわち年長者が「見て評価する側」・年少者が「見られ評価される側」なのだ、という意見である。「日本的経営」の特質だった「年功序列制」は1990年代後半以降崩れてきたといわれているが、広義の社会文化的な「年功序列」は全く変化がなかった、ということだろうか。それとも教員と福祉職員というグループ特性ゆえにこうした結果が出たのだろうか。この点については今後さらに考えていきたい。

5．結語と課題

本稿では「価値観・労働観・ライフスタイル等に関する日本と北欧の比較調査研究」の第一次量的調査で取り上げた設問のうち、自尊感情・対人信頼感・文化的自己観の3つの心理尺度に焦点を当て、第二次質的調査のインタビューによってその解釈を深めることを試みた。彼らの意見が両国民および各グループを代表しているとはいえず、直ちに一般化することはできないが、我々の研究に多くの貴重な示唆を与えてくれた。

3尺度に関する解釈に共通して伺えたのは、スウェーデン人が自己及び周囲との相互作用というミクロな焦点化をおこなうのに対し、日本人は一般的な社会というマクロな視点から俯瞰する、という傾向のように思われる。

スウェーデン人の場合も、例えば教師の職業的な地位が相対的に高いと解されることは日本と同様で、社会が自己意識に対して影響を与える。しかし、その規定力は日本のように直接的でなく、「高い教育→高い社会的地位→社会的なプレッシャー＋自己に対する要求水準の上昇→仕事がうまくいかなかった場合は自尊感情の低下」のように、内的なメカニズムや周囲との相互作用を経由して間接的に働くようだ。

ミクロな相互作用の中で、スウェーデン人は年齢にあまり関わらず、他者の視線や評価に対するアンテナを敏感にはっている。外的な態度や行動に自己の一貫性を示し、なおかつそれが自他の評価を得るものであるためには、周囲の視線や評価に照らし合わせた柔軟なセルフモニタリングが必要となるからだ。我々の第一次量的調査ではスウェーデン人の相互独立性と評価懸念の両立という、文化的自己観に関する先行研究と異なる結果が得られたが、それを整合的に解釈することができたのはこの第二次質的調査の最大の成果の１つと考える。この他者へのセンシティビティは、対人信頼感の高さ、つまりまず人を信頼するという行為戦略のリスクを軽減する働きももつと思われる。

これに対し、日本人の場合は、マクロな社会における位置づけ、つまり偏差値や職業や年齢が、自己意識に対し直接的で大きな規定力をもつように思われる。またスウェーデンと違い、内的な自己と外的な態度や行動の一致という要請が希薄、というより「本音」と「建前」を使い分けるほうがよしとされるため、他者の視線や評価を繊細にセンサリングする必要があまりない。

また本稿の大きな目的の１つは、なぜ社会人と比べて大学生のほうがより「日本人らしさ」、つまり低い自尊感情・対人信頼感・相互独立性＋高い相互協調性を示すのか、を考察することだった。特に教員と大学生のインタビューを通じて、学生が社会的に不利な立場に置かれていることが浮かび上がってきた。年功序列の社会で「見られ評価される側」であり、学校教育では「全体的なまとまり」が優先され、大人から十分に守られていると感じていない。保護者への経済的な依存に負い目を感じ、これから出ていくべき社会には否定的なイメージが溢れている ──。

ただ繰り返しになるが、今回の第二次質的調査の結果をすぐ一般化することはできない。特に古典的な年功序列の文化が今回前面に出されたのは、教員と福祉職員という職業の特性という可能性もある。今後より調査対象を広げ、考察を深めていきたい。

《註》

i　ただしスウェーデンの２つの大学生Ｇでは、コーディネーター役の大学教員が１名ずつ加わっている。

ii　第１次量的調査では原 10 問を全て採用したが、本稿の分析では、多くの先行研究の指摘に従い、問８を除外して９問を使用している。この詳細については大塚ら（2012）を参照されたい。

引用文献

星野晴彦・大塚明子・秋山美栄子・森恭子 2012a「日本とスウェーデンの援助規範意識比較に関する研究 ── 福祉政策に影響する両国の援助規範意識の特性に着目して ──」『文教大学生活科学研究』第 34 集，27-36.

星野晴彦・大塚明子・秋山美栄子・森恭子 2012b「日本とスウェーデンの援助規範意識比較に関する研究 ── 福祉職員・教員・大学生の比較分析を通して ──」『北ヨーロッパ学会』第 10 巻，33-41.

吉川徹編著　2007『階層化する社会意識～職業とパーソナリティの計量社会学～』、勁草書房

森恭子・大塚明子・秋山美栄子・星野晴彦 2013「移民への寛容意識に関する日本とスウェーデンの比較調査研究～大学生・教員・福祉職員への聞き取り調査報告価～」『文教大学生活科学研究』第 35 集.

大塚明子・秋山美栄子・森恭子・星野晴彦 2011a「価値観・労働観・ライフスタイル等に関する日本と北欧の比較調査研究　第１次報告」『文教大学人間科学部紀要第 33 号』，105-119.

大塚明子・秋山美栄子・森恭子・星野晴彦 2011b「『集団主義の日本』と『個人主義のスウェーデン』の再検討 ── 心理尺度を用いた比較調査を通じて ──」『北ヨーロッパ研究』第８巻，1-11.

大塚明子・秋山美栄子・森恭子・星野晴彦 2012「スウェーデン人および社会人と比較した日本人大学生の自己意識の特質について」『人間科学紀要』

山岸敏男　2008『日本の「安心」はなぜ、消えたのか～社会心理学から見た現代日本の問題点～』、集英社インターナショナル